

伝統建築の構造と理念

高橋 貴

—インドネシア, 韓国, 北アメリカ—

伝統建築は、主として大工や石工などの職人が地域の材料を使って建てた建物で、風土はもちろん、人々の世界観や生活様式と密接に関係している。そうした濃密な空間である伝統建築の構造・理念を探り、それが今日どのように伝えられているのか、明らかにするのが本稿の課題である。

今回の研究では、高橋がインドネシアのトバ・バタック、福本が韓国の慶尚北道安東地方、渡辺が北アメリカのナバホ・インディアンの家屋を現地調査した。

1. インドネシア、トバ・バタックの家屋

1-1 はじめに

インドネシア北スマトラ州の内陸部に住むトバ・バタックは、樹や土塁に囲まれた独特の集落フタに住んできた。フタは一種の小宇宙であり、人・神・祖先・動物が共存しながらくらししていた。しかし今日生活環境が大きく変わり、集落や家屋も変わりつつある。そこで本稿では、伝統的集落フタと新しいタイプの集落ドゥスンとを対比しながら家屋について論じることにした。

調査地は、北スマトラ州北タパヌリ県ルンパンジュル郡ジャンガドロク村（以下J村）である。州都メダンからおよそ200km、車で5時間ほどのところに位置している。標高が1,000mあり、そのため気候は温和で過ごしやすい。主な生業は水稻耕作で、収穫は年1回である。戸数は117戸、人口は552人である。主な職業は農民174人、役人25人、日雇い21人、商人6人である。

図1-1はJ村の概念図である。村長に描いてもらったものであり、正確ではないが、フタとドゥスンの位置、家屋の並び方、伝統家屋や空家の状態などが理解できよう。写真1-1、1-2も参照されたい。

1-2 フタとルマ

伝統的集落フタには顕著な特徴がいくつかある。4つの観点から簡単にまとめることにしよう。

第1にフタは防御を中心につくられている。例えば、まわりが崖になった小高いところ、木々がうっそうと茂る森の奥、川を渡ったところなどである。平地の場合には周囲を土塁や堀で囲う。このような防御的立地は、か

つて敵襲がひんぱんに行われたことに由来する。

第2は広場中心の構成である。広場は重要な公的空間で、祭りの時スイギュウを殺したり、踊りを踊ったり、参列者が食事をする。この広場をはさんで片側に家屋ルマが並び、その向かいに高倉ソポが建つ。家屋とその向かいの高倉はもともと1つの家族が所有していた。

第3は地つきマルガ（氏族）の存在である。地つきマルガというのは、集落を拓いた父系氏族のことで、フタに関する一切の権利を有している。妻方居住などにより移住してきた人々はよそ者であり、そうした権利はもっていない。フタの長はラジャ・フタといい、直系の年長者が選ばれる。フタは、地縁と血縁を共有する、いわば運命共同体であった。

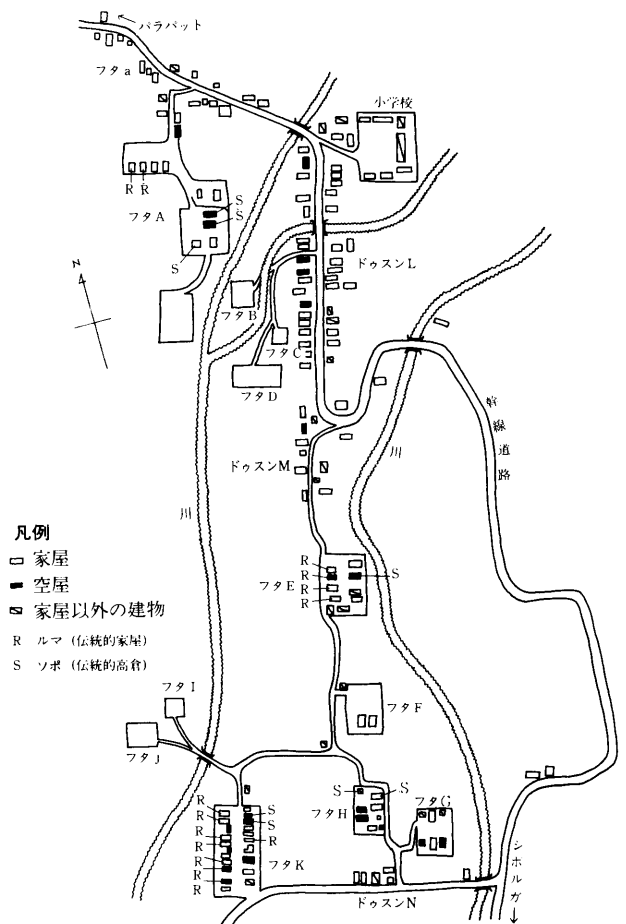


図1-1 ジャンガドロク村概念図



写真1-1 フタK. 古いタイプと新しいタイプの家屋が見られる。

第4は世界観・靈魂観との関係である。フタの入口付近には必ずハリアラが植えられ、パルトコアンがある。ハリアラはボダイジュのことをいい、トピンによれば、地下と地上と天界を結ぶ生命の木で、一人一人の運命を左右するものという^{文1)}。パルトコアンは墓であるが、誰でも入れるというわけではない。フタの地つき氏族の男とその妻であること、子供や孫がいること、年寄りであることなどの条件がある。つまりバタック人としてのつとめを十分に果たした人だけがパルトコアンに葬られ、先祖としてまつられることができる。このハリアラとパルトコアンはそれ故、バタックの世界観、靈魂観を表す極めて重要なシンボルということができる。

建築物についてはかつて報告したことがあるので、ここでは要点だけ述べる^{文2)}。家屋は大きな鞍型屋根をもつ高床住居で、2つのタイプがある(写真1-1)。

ルマ・ゴルガ : 彫刻、絵つきの家屋

ルマ・バタラシアン : 彫刻、絵のない家屋

ルマ・ゴルガは前面の壁に水草・ライオン・スイギュウの顔、2対の乳房などが彫られ、赤黒白の3色で彩色さ



写真1-2 ドゥスンL. 幹線道路沿いには古いタイプの家屋は見られない。

れる。これらは魔よけや多産の意味をもっている。また、左右の壁には集落の様子や戦争などの絵が描かれる。ルマ・バタラシアンは彫刻と絵のない家屋であるが、それでも正面左右にライオンの顔の木彫がある。どちらのタイプも、床下にスイギュウやブタ、高床に人間、屋根裏に神々や祖先というように共存してくらしていた(図1-2)。

家屋は、前部が頭、後部が足というように身体にもたとえられる。また、内部は1室であるが、左奥(家から見て)が1番上座、次いで右前、左前、右奥という順に格付けされてもいる。

広場をはさんで建つのが高倉である。高倉では、屋根裏に穀を収納し、高床ではた織りなどを行う。床下はスイギュウの畜舎である。高倉にも2つのタイプがある。

ソポ・ゴルガ : 彫刻、絵のある高倉

ソポ・バタラシアン : 彫刻、絵のない高倉

どちらも屋根裏への入口扉にはトカゲの浮彫が見られる。トカゲは土地の神であり、作物の豊穡をもたらすとされ、ときおり供物が捧げられた。

表1-1 集落別に見た家屋と屋根のタイプ

家屋の種類と屋根		ルマG	ルマB	ソポG	ソポB	E	ES	EB	EL	G	B						
集落名	戸数	草	ト	草	ト	草	ト	草	ト	草	ト	ト	草	ト	他		
フタ A	13			2		2	1	6	1						1		
フタ B	C																
フタ C	C																
フタ D	C																
フタ E	7	3		1		1			2								
フタ F	2							1	1								
フタ G	4							1	2								
フタ H	5							1									
フタ I	C						2	1		1							
フタ J	C																
フタ K	20	2	1	2	3		1	1	1	7		1			1		
フタ a	13							3	4		1			3	2		
ドゥスンL	35							25	4			4		2			
ドゥスンM	11							5	3		1		1	1			
ドゥスンN	7							1	4		1			1			
計	117	5	1	3	5	0	0	4	4	4	50	20	5	4	1	8	3

ルマG: ルマ・ゴルガ

ソポB: ソポ・バタラシアン

EB: エッペル・バトゥ

B: バレバレ

草: イジク(サトウヤシの繊維毛) 葺き

ト: トタン葺き

他: 板葺きかヤシの葉葺き

ルマB: ルマ・バタラシアン

E: エッペル

EL: エッペル・ロテン

ソポG: ソポ・ゴルガ

ES: エッペル・サトンガ・バトゥ

G: ゲドゥン

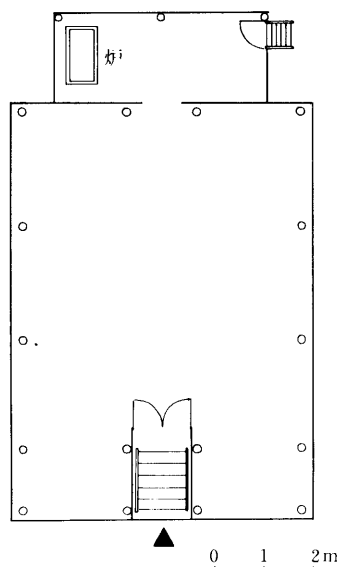


図1-2 ルマ・ゴルガの家

1-3 フタの現状

約10年前に調査した時、フタはまだ1-2で述べたような特徴を多くもっていた。どの家にも電気がなく、ブタやスイギュウがフタの中を歩き回り、沐浴、洗濯、排泄は川で行った。ルマ・ゴルガやルマ・バタランアンなどの家が数多くあり、人も住んでいた。ところが、今回調査したところ、大きく変わっていた。この章ではフタの変化の様子とその理由を説明することにしよう（表1-1に集落ごとの家屋と屋根の種類を示した）。

1) 土地利用の変化

これは、フタが防御的な機能から生活機能優先に変化したことに対応する。その最も顕著なものが土塁の撤去である。防御としての役割が不要となったため、土塁の一部を崩し、通路、家屋、倉庫、畜舎、菜園、池などを造るようになった。政府の補助で水浴び場やトイレを造る場合も同様である。

家屋まわりについては、従来から軒下が占有空間であった。仕切りはなかったが、そこに柵を造るようになった。特に後述する新しいエッペル・タイプの家屋に多い。

フタ内の敷地は、マルガという父系親族集団の共同所有であり、他者へ売却といったことはできないが、今後利用の仕方が変化してくれば、所有権の考え方も変わることになる。

2) 付属屋の増設

ルマの背後に下屋を付けて台所を別棟にする例が見られる。こうすることにより、部屋を広くとることができ、煙が部屋に入ってくることもなくなる。広くなった部屋に仕切りを設け、夫婦の寝室や娘の部屋としていたところもあった。また台所の近くには、垂れ流し式の小用トイレも造られるようになった。なお、エッペルの場合は、初めから間仕切りによって空間が分割されている。

3) ソポの家屋化

J村には現在ソポが9棟あるが、7棟は家屋（空家も含めて）として使われている。2棟は倉として使われているが、このうち1棟は最近まで人が住んでいた。こうした家屋化の理由として、人口が増え、住宅が必要になったこと、大家族より核家族の志向が強くなったこと、籾の収納は付属屋などでも可能であり、倉としての役割が以前ほど重要でなくなったこと、壁を付けるだけでよく、改造にほとんど金がかからないことなどがあげられる。

4) エッペルの増加

現在、建築される家屋のほとんどはエッペル・タイプ、すなわちマレー系の人々の間でふつうに見られる地床・低床式家屋である（図1-3）。建設費が200～500万ルピア（約10～25万円）と安いことが第1の理由である（ルマ・ゴルガの建設費は2,500～3,500万ルピア）が、このほか、地床のため出入りしやすいこと、床下でスイギュウを飼う必要がなくなったなどの理由をあげることがで

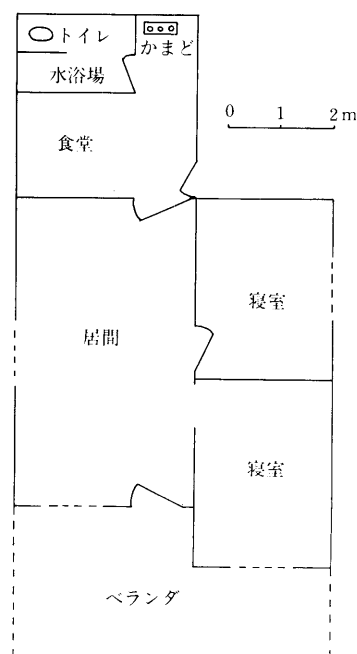


図1-3 エッペル・サトンガ・バトウの家

きる。エッペルには次のタイプがある。

エッペル	：板壁の家屋
エッペル・サトンガ・バトウ	：腰壁にレンガ使用
エッペル・バトウ	：レンガ造り
エッペル・ロテン	：2階建て

5) 伝統家屋の売却

ルマ・ゴルガが少なくなるにつれて、それを購入、移築したいとの話が出るようになった。観光地のホテルやレストランがそうした希望をもち、何軒かの家屋が引き取られていった（リトルワールドに展示してある家屋もこの部類に入れてよい）。住民たちはいちいち階段を昇って入る不便な家よりも、地床式の家屋の方が住みやすいと思っており、昔からの家屋を手放すことにあまり抵抗はないようだ。また、装飾板壁だけを使って新しい家屋を造る、といった例もしばしば見かけた。

6) 移住

フタにおける転入者と転出者を見ると、後者が圧倒的に多い。転出者は個人と家族に分けられる。個人の転出者の大半は若者と老人である。若者は学校や就職でフタを離れ、老人は子供たちの住むところへ行く。もうひとつが家族ぐるみの移住である。伝統的な家屋を解体し、その材料を利用して、幹線道路に近いところに引っ越しする。道路沿いであれば、バスや車の利用が簡単であるし、日雇いの仕事もある。このほか、結婚して新居を建てるといった例も少なからずある。

7) 廃村

家族ぐるみの移住の結果、廃村となるフタも出てきた。11のフタのうち、現在5つが廃村となっている。これらはいずれも交通の便が悪いところに立地しており、防御タイプの集落は完全に役割を終えたといえることができる。

移住先については次章で述べる。残った6つのフタでも転出者が多く、空家や空地がかなり目立っている（図1-1）。

8) 観光地化

25kmほど離れたパラパットは有名なりゾート地であり、国内はもとより、ヨーロッパやオーストラリアなどからたくさんの観光客が訪れる。そこからさらに足を延ばして、「バタック族の村探訪」ツアーに参加する。フタAやEにはそうしたグループが1日に2つや3つはやってくる。村人は、織物ウロスと装身具を売り込み、何がしかの収入を得る。かくしてフタの中での生活が変わりつつあるのと同時に、「伝統的な」家屋や生活が観光資源として新たな経済的価値をもつようになってきた。

9) キリスト教化

J村にはHKBP (Huria Kristen Batak Protestan) とGBI (Gereja Bethel Indonesia) の2つの教会がある。ほとんどの人はどちらかに属しているが、日曜礼拝に出席する人はそれぞれ40~80人で、多くはない。しかしこの組織が、従来のフタを基盤とした親族組織を横断しており、新たな人間関係をつくってきた意義はひじょうに大きい。同じ宗派の教会同士の交流もあり、そのつながりはかなり遠方まで広がっている。

10) 生活改善

まず近年最も大きな出来事は1982年の電気の導入である。電気があれば夜更かしができるし、電気製品も使える。それ以前とは比較にならないほど便利になった。

現在の村長はGBIの牧師でもあり、旧習にこだわらないため、いくつかの政策を実現させた。集落ごとに水浴場（水飲み、洗濯も可）を造り、村の数か所に便所を建設した。便所は住民のためというよりは観光客用という名目で補助金を得ている。このほか、村内道路の補修整備を行ったり、山から管を引いて飲料水を確保したり、不衛生という理由から集落内でブタを飼育することをやめるよう説得したり、個人的に池を造りアヒルやコイに似た魚を飼うなど、さまざまな改善運動を行ってきた。川で水浴び・洗濯・排泄を行い、床下でブタを飼い、夜になったら寝るという、かつてのくらしは現在大きく変わりつつある。

11) Uターン

村から出ていった人々の中には、故郷に家屋を建て退職後帰りたい、それがかなわなければ、せめて立派な墓を造って先祖の霊を慰めたいと思っている人が多い。そうした人が、最近コンクリート製の家屋を建てた。村で初めての高級住宅である。すぐ近くのフタには両親が住んでいるが、その家屋は末弟に譲られている。末子相続が一般的慣習だからである。いろいろな事情で帰郷がかなわない人は親族と諮って墓を造る。立派な墓が各地に造られるようになった。

12) フタKの場合

フタKは集落としての機能を比較的強く保持している。その理由は、地つきマルガの人たちだけが住んでいることによる。集落の長ラジャ・フタもいる。家屋の構成は、20戸のうちルマが8戸、ソボが2戸、小屋1戸、エッペル8戸となっている（表1-2）。このうち居住している家は13戸で、空家が7戸もある。家族数の平均は3人、2家族を除き核家族で、単身者ないし夫婦だけの家族が7戸もある。その多くは60歳を超える高齢者である。こうした状況を考えると、フタの存続は少々難しいといわざるを得ない。他のフタも困難な状況にあるということをつけ加えておく。

表1-2 フタKの家別データ

家番	家種類	建築年	屋根材	壁材	床高	柱数	家族数	年齢	職業
1	ルマB	1976	イジユク	板	高	6×7	6	35	農民
2	ルマG	1920	トタン	板	高	6×8	6	30	警官
3	E	1960	トタン	板	中	—	0	—	—
4	ルマG	1921	イジユク	板	高	6×7	1	70	農民
5	ルマG	1931	イジユク	板	高	8×9	3	83	軍人
6	E	1947	イジユク	板	高	—	0	—	—
7	E	1965	トタン	板	高	—	6	58	農民
8	ルマB	1942	トタン	板	高	6×7	5	55	農民
9	ルマB	1942	トタン	板	高	6×8	0	—	—
10	ルマB	1937	トタン	板	高	6×8	0	—	—
11	ES	1984	トタン	板	低	—	2	65	農民
12	バレ2	1980	トタン	板	中	—	1	90	農民
13	ソボB	1908	イジユク	板	高	2×3	0	—	—
14	ソボB	1908	トタン	板	高	2×3	0	—	—
15	E	1911	トタン	板	中	—	1	70	農民
16	E	1965	トタン	板	中	—	2	65	農民
17	ルマB	1945	イジユク	板	高	6×8	2	70	農民
18	EB	1989	トタン	板	低	—	2	65	教師
19	E	1967	トタン	板	中	—	0	—	—
20	E	1976	トタン	板	中	—	2	65	農民

マルガ名はすべてマヌルン
柱数は間口×奥行で、建物の一応の規模を表す。

1-4 新しい集落の形成

フタの立地条件が現代の生活に不適合となるに伴い、新しい集落が形成されるようになった。こうした集落は、フタに対してドゥスンとよばれる（写真1-2）。

ドゥスンはL、M、Nの3か所にあり、いずれも幹線道路沿いもしくはそのすぐ近くに位置している。このうち最も早く居住が始まったのはドゥスンLで1960年代から、ドゥスンNが70年代から80年代にかけて、ドゥスンMが最も遅く、80年代に開拓された。

表1-3は、どこから移住してきたかを示した。53戸のうち、現在廃村となったフタからの移住者は半数の26戸、村外からの移住者はわずか6戸、残りは現存しているフタからの移住者ないし独立者である。なお、地理的に近いドゥスンへ移住する傾向が見られることを指摘しておく。

表1-3 ドゥスン居住者の出身フタ

出身フタ 移住先	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	村外
ドゥスンL (35)	7	8	8	6	2	2	1	1	1	1	2	2
ドゥスンM (11)				1	1	1					1	3
ドゥスンN (7)								3	1	2	1	1

次にマルガの構成である。いずれのドゥスンも複数のマルガからなる。ドゥスンⅠの場合にはマヌルン、サラギ、ナインゴランなど8つもある。それ故、従来のような地つきマルガは存在せず、いわば寄り合い世帯(集落)になっている。

ドゥスンの特徴を、フタとくらべながら整理してみよう。宅地は道路に面して区画された私有地であり、まわりに土塁や堀といったものがない。土地の共同所有がなく、住んでいる人のマルガは多様である。寄せ集めの集団であり、したがって運命共同体という意識が希薄である。地つきマルガ、集落の長ラジャ・フタ、生命の木ハリアラ、年長者の墓パルトコアンなど、フタの重要な指標もことごとく見られない。家屋は比較的新しく建てられたエッペル・タイプばかりで、伝統的な建物はな。職業から見ると、やはり農民が多いが、他の職種の人も多い。例えば飲食店の経営者、役人、学校の先生、日雇い、運転手、ヤシ酒販売人などである。村外へ転出する人、村外から転入する人も多い。要するにドゥスは小さな「町」であり、そこには、フタがもっていたような歴史観・人間観・世界観が見られない。バタック人としての考え方を全く失ったというわけではないが、バタックの村は、フタにおける居住からドゥスンにおける居住へと確実に変化しているといえることができる。

こうした状況の中で、逆にアダット(伝統)への関心が高まっている。1つはすでに述べたように観光との関連である。アダットな建物、生活が観光客をひきつける結果、価値あるものとして見直されるようになった。ある家の老人は、近くの息子の家に居を移し、ルマ・ゴルガの本宅は博物館にすると真剣に語っていた。

2つめはアダット意識の表出ともいえるべきものである。バタック家屋の伝統的なデザインー水草やスイギュウの顔ーがさまざまな建物に使われるようになった。ホテル、店、役所などの入口や屋根、家屋の装飾、記念像、墓、町村の境界標識などである。このうち記念像はトッグといい、マルガの先祖であるラジャをまつ。墓はタンバクといい、近い親族が集まって造る。どちらも一族の名誉にかかわることであり、近年、はでなものが造られるようになった。中でも立派なものはドゥスンⅠにある家型の墓である。材料がコンクリートである点を除けば、サイズ・デザインとも伝統家屋とそっくりに造られている。建設には8人の大工で1年半かかったという。費用はしめて6,000万ルピア、伝統家屋ルマ・ゴルガを建設する費用の2倍である。このような高額を墓造りにかけるのは先祖への供養、世間への誇示、相続財産の利用などいろいろな理由があろう。真意はそれぞれ異なっても、より立派な墓を造ろうとする傾向は強くなっている。

1-5 まとめ

トバ・バタックの社会には、防御機能型集落フタと生活機能型集落ドゥスンとがあることを指摘し、それぞれの特徴を論じた。フタでは、人・神・動物が共生し、さまざまな経済活動や儀礼行為を行ってきた。特殊な世界観や靈魂観も見られ、その意味でフタは小宇宙的な空間であった。ところが社会環境が変わり、人々はフタを出て幹線道路沿いに住むようになった。これが新しい集落ドゥスンであり、そこには従来あった親族関係、土地利用、祖先祭祀^{さいし}などが見られない。

ドゥスンへの変化はどのように解釈すべきなのだろうか。伝統的な価値観を引きずっているのか、いないのか。現状から見るかぎりでは、バタック人は、民族としての独自性を固守することよりも、むしろ周辺のマレー系住民との文化的共通化を進めるのではないかと予測される。国家政策や教育とも関連する大きな課題である。

(高橋 貴)

2. 韓国安東地方の家屋

2-1 はじめに

安東地方は韓国のほぼ中央、慶尚北道北部の山間盆地に位置し、安東市と安東郡が行政上の範囲である。気候は8月の平均気温は26℃、1月の平均気温は-4℃、年間降水量は995mm位である。

安東は儒学者・李退溪(1501~1570年)の出身地で、儒教の伝統が今日まで色濃く残っている土地柄である。家のくらしにあっては儒教が根底にあって、儒教式に執り行う先祖のまつりは重要な行事であり、また日常生活においても、「男女有別」、「長幼有序」など儒教を生活規範としてきた。こうした男性社会の儀礼や道德などが中心の儒教に対し、女性社会では、主婦は家庭の守護神としての成造神を信仰し、悪い霊を追放することにより、病気治療や幸運招来などを願う^{ふぞく}巫俗式の信仰に強い関心をもってきた。また、子孫繁栄、家内安泰を願う巫俗以外のまつりも主婦によって行われてきた。

その家であるが、現在、この地方には伝統的な家と近代的な家のどちらもあって、農村では前者が、安東市内では後者が目につく。伝統的な木造、平屋建ての家では李氏朝鮮時代には支配者層であった瓦屋根の旧両班の家と20年位前までは藁葺き屋根だった農家がある。

こうした家屋の中から、今回は伝統的な旧両班の家に焦点を当て、2つの目的をもって見ることにした。その1つは儒教の理念が体现されている家屋がどのような工程で建築されるのか、もう1つは建築段階では住居空間をどのような認識のもとに仕事を進めているのかを明らかにすることである。

2-2 敷地内の空間構成

伝統的な旧両班家では儒教の理念は次のように表現されていた。敷地内に四代の先祖をまつる祠堂があり、位牌が安置されている。家には父系の直系家族が居住し、長男が家督を相続して先祖をまつっていく。祖先を崇拜し、信仰することも「親孝行」のひとつである。

また、「男女有別」の規範は住まいの空間に実現されている。図2-1の家屋^{注1}では主人の部屋は、床下暖房の温突（オンドル）の部屋（寝室・居間・食事室・男性客用の応接間）と夏用の板の間からなる。長男の部屋も家屋の前面に配置されている。男性の部屋へ女性が入って食事や談笑することはない。茶を運ぶ女性は、中庭の方に開く小扉から茶を差し入れるだけである。「男女七歳ニシテ席同ジカラズ」というわけである。

奥が女性の空間で、主婦の板の間には米櫃、食器棚、膳を重ねて置いたりする。主婦の温突の部屋はどの部屋よりも広い。この部屋は主人と主婦の寝室であり、食事室、居間、女性の客間となる。ここで主婦は長男やその子供たちと食事をする。主婦の部屋に住まうことは家計を切り盛りし、子弟の教育に目配りをするなど、家の中の采配^{さいはい}を振るう立場にあり、その象徴が米櫃の鍵の管理である。

炊事場の隣の嫁の部屋は長男夫婦の寝室であり、嫁の食事室で、嫁はこの部屋で仲の良い手伝いの女性たちと一緒に食事をする。

物置にはコメやムギなどの穀物が入った甕^{かめ}、乾燥肉や魚などの食糧を保管する。管理は主婦が行い、主人は甕の中身について一切口だししない。また、炊事場に立ち入ったりすることもない。家政の主権を主婦に委ねているからである^{注2}。

2-3 建築従事者と寸法

伝統的な中規模の瓦葺きの家屋を完成させるまでの職種とその人数は、次のようである。大工が5名（大工3名、手元2名）、壁塗りや温突を造る土工が5名（専門2名、手元3名）、屋根葺きが4名（専門1名、手元3名）、建具師が2名、土塀を造る者4名（専門1名、手元3名）、石工が数名で、総計20名位が従事する。そのうちの1名の大工が元請けとなり、金銭関係、建築材料の手配、仕事手順に関わる指揮をとる。依頼者（主人）と元請け大工の間で経済的な合意が得られると、仕事始めの時点で、依頼者は大工に請負額の半分を支払い、棟木を上げた時点で残金の半額、完成時点で残り分を支払う。元請け大工から土工や屋根葺きなどへの支払いがなされる。

建築に先立って、敷地は風水師^{注3}に鑑定され、風水師の指導を受けながら、依頼者は中心となる主屋を基点にして大門、便所、井戸などの建物を配置する。依頼者はこの配置を大工に伝え、大工は板や紙に書き取る。

この時、寸法についての打ち合わせも行う。寸法の基

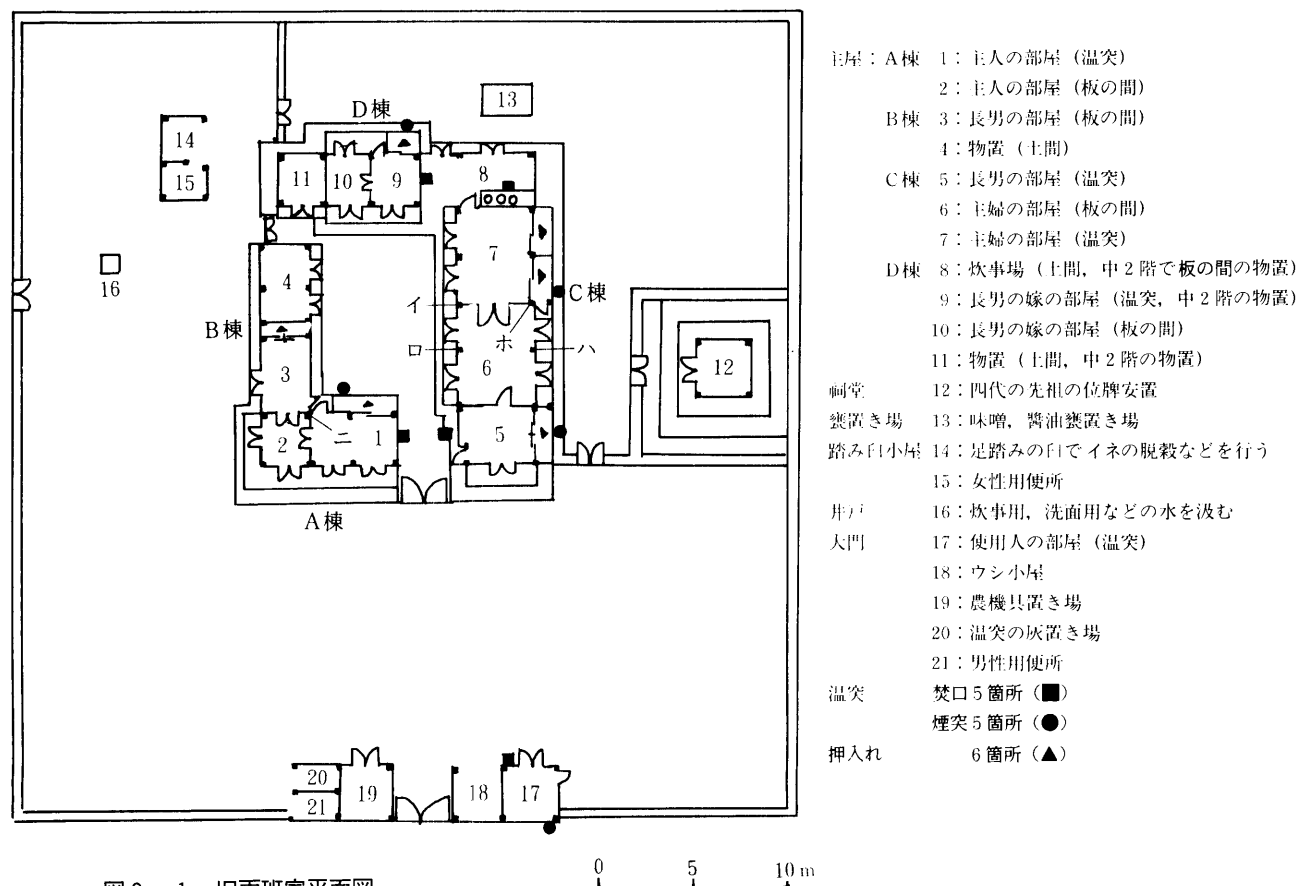


図2-1 旧両班家平面図

本的な単位は寸、尺、間である。「寸」(約3.03cm)は、中指と人差し指を真っ直ぐ伸ばして揃え、人差し指の第一関節あたりの横幅を1寸とする。中指と人差し指を伸ばした寸法が3寸、中指と親指を伸ばした寸法が7寸で、この2つの動作によって10寸、つまり1尺の長さが得られる。大工は各自の身体測定による物差しをもっており、どの大工の寸法を基準にして採寸するかについても決める。「間」は4辺に建てられた柱間の空間の広さをいう。この間を使って家の大きさを表現する。例えば図の家の主屋は16間である。但し、「間」には定まった寸法というものはなく、柱と柱の間の長さについても、依頼者と大工の話し合いで決める。家屋によっては6尺の場合もあるし、7尺、8尺の場合もある。

2-4 建築過程と構造

建築作業は材木^(注4)の加工から始める。30日位で仕事が終了する。仮に、3、4月に加工を始めるとすると、年間で最も降雨量の多い7月までには屋根を葺き終わり、10月までには壁を塗り終え、11、12月には完成する。次に建築作業の工程を主屋を中心に述べる。

1) 基壇・軸組み・小屋組み

敷地の建築部分に粘土と砂利を盛る。個々の棟の基壇の高さについては依頼主が風水師と相談してすでに決定している。高低の概略はC、D棟が高く、A、B棟はそれよりも低い。基壇造りは近隣の人に協力を頼み、作業を行う。粘土と砂利を打ち固めていくこの作業は2、3日間続く。図面の家屋では、高さ1尺内外の基壇である。出来上がった基壇の上面に花崗岩の礎石の直径に見合った穴を掘り、穴に砂利を入れて礎石を置く。6寸角の柱では、1辺が1尺位の四角い花崗岩の礎石を用意する。まず最初に置く礎石は図2-1の主婦の部屋の(イ)の石である。他の基礎石は図面にもとづいて据えていく。礎石を据えるには2日間かかる。

次は柱建ての作業である。柱を建てる時には、礎石の上面の凸凹に合わせて柱と石との接着面を削り、柱を安

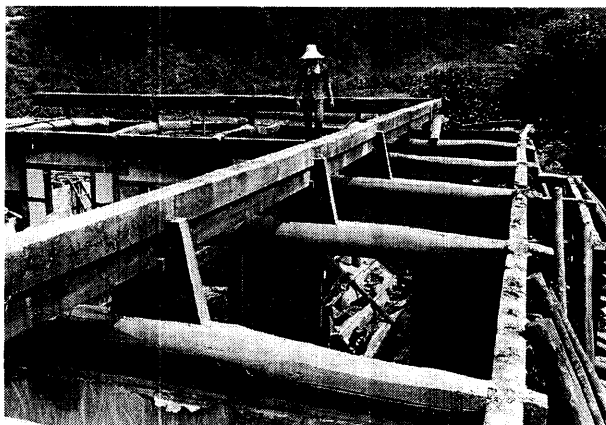


写真2-1 小屋組み・2段重ねの棟木

定させる。最初に建てる柱はこの家屋では、C棟、主婦の板の間の柱(ロ)である。これが「第1の柱」でハンジュとよばれ、キドンとよばれる他の柱とは区別する。第1の柱が建てられると、この柱と対になる柱(ハ)を据え、2本の柱の間に梁が架けられる。順次、C、D棟における柱に梁と桁が架けられる。A、B棟の場合は、最初に建てられる柱は(ニ)で、この柱がA、B棟の要になる。棟木と桁は継ぎ合わせているが、その両端には材木の根の方を配置する。柱を建てる作業は2日間で終了する。

A、B、C、D棟の軸組みが出来ると、小屋組みの仕事に入る。それぞれの梁の中央の凹部に束が建てられるが、棟木のレベルを合わせるために束の高さはそれぞれに異なる。束の上部中央の凹部に棟木が2段重ねでのせられる(写真2-1)。C棟の主婦の板の間の棟木には棟上げの年月日が記される。屋根が入母屋の箇所(A棟の西側、C棟の南側、D棟の東、西側)では隅降り棟を設けるが、この部分の材には先でカーブをもたせた角材を使い、角材の両側には丸太を半切したものを釘付けしている(写真2-2)。

垂木は棟木から桁に1尺位の間隔で、材木の根の方を軒先に揃えて架けられる。架け方は左右の面に交互に架けていくが、架ける度に、棟木の上端に出た垂木の穴に数本のハギの生木をねじりながら入れ込み、連結させていく。屋根勾配は5寸位である。小屋組みに関してはここまでが大工の仕事で、3日間位で行える。

軸組み、小屋組みに使う木材の種類はマツである。

2) 屋根葺き

丸瓦と平瓦の2種類の瓦を基本とする。葺く箇所に合わせて、現場で瓦を欠き削って整形する。平瓦と丸瓦は3対1の割合で葺き、坪当たり80枚位である。まず、平瓦の裏の曲線と横幅の寸法に合わせて、マツ材で瓦座を整形する。垂木の先端(軒先)に瓦座の台を釘で打ち付け、台の上に瓦座を取り付ける。A棟の西端、C棟の南端、D棟の東西両端の棟に曲線をもたせるために、棟木



写真2-2 屋根入母屋部の小屋組み

に丸太をのせ、土台造りを行う(写真2-2)。次に、すべての垂木と垂木の間には親指位の太さで、3尺位の長さの藁縄を軒先から棟へ、棟から軒先へと途中で足しながら置く。その縄の上に半切した雑木を置き、雑木と下の縄とを別の縄で結わえる。これは、上に置く粘土の受け皿になり、また、室内から見える垂木の間に漆喰を塗る工程では、接着を良くするための工夫でもある。粘土に粘り気があり、石の混入がないと屋根は30、40年もつが、粘りが悪いと粘土が痩せてきて10年位で葺き替えということになる。

軒先から上方に、粘土が軟らかいうちに平瓦を足で踏んで粘土に定着させながら葺いていく。上下の平瓦の間は隙間がないようにと、注意を払う。列と列の間には5寸位の隙間を空け、そこに粘土をのせ、粘土の上に丸瓦をのせる。技術的に難しい箇所は入母屋の部分で、上方の狭くなっていく箇所は、置く場所に合わせて瓦を削りながら葺く。流れや入母屋を葺き終え、10日間位乾燥させてから棟を葺く。仕事量は1日で1間位である。16間の主屋では瓦座を付け、粘土を置き、瓦を葺き上げるまでの日数は20日間ほどである。

3) 土壁、温突

屋根葺きが終了すると、土工の仕事である壁塗りにかかる。柱の間に一定の間隔で数本のマツ材を小柱として入れる。小柱間に芋麻の茎を縦・横に入れ、小柱と茎を縄で結わえ、壁の芯を作る。粘土にはひび割れを防ぐために切った藁を混ぜ、塗った粘土が落ちないように、仕事は茎が出た面から開始する。片面を1週間位で乾燥させ、もう一方の面を塗り始める。表裏の粗塗りが乾燥すると、篩でふるった目の細かな粘土を塗り、この上に漆喰を塗って壁を仕上げる。垂木と垂木の間にも漆喰を塗る。この作業では3名が芯を編み、2名が塗り、1名が土運びを行う。30日位の日数がかかる。

床下に温突を造るのも土工の仕事である。焚口と煙突の位置、煙道を設計する。暖房効率の良い温突は、煙の流れが良いように煙道に勾配をつけ、煙突の手前で煙溜を掘る。壺状の煙溜の底は、焚口の底と同じ位のレベルにするのがよい。床下の煙道の壁は粘土をつなぎにして1尺位の高さの石積みにする。壁の上部には直径1寸弱の小石をわずかの間隔をもって置く。これは天井石を速く暖めるための工夫である。壁の上に平らな砂岩を天井石にして置く。天井石の上には切った藁を混ぜた粘土を1寸5分位の厚さにはる。その上に乾燥した粘土に砂を混ぜたものを3分ほどの厚さで置く。この段階で1度火を入れて、粘土を乾燥させる。1週間後、のりで下貼り紙を貼り、下貼り紙に重ねて温突紙をのりとダイズの粉を混ぜて貼る。温突の油紙の表面を滑らかにするために、布にエゴマを石臼で砕いたものを入れて、油紙の表面をなでて、磨き上げる。温突の部屋の天井、壁に紙貼りする。

る。

壁、温突の紙貼りは家人の仕事である。

4) 板張り、土塀など

壁が乾燥するのを見計らって、大工は板の間と縁に床板を張る。板張りは大工仕事のうちでも力量が問われるところである。例えば主婦の部屋の板の間では梁の方向に5本の根太を大引に等間隔に嵌め、根太と根太の間に彫られた溝に、板床を嵌め込む。経験豊かな大工は板と板の間に隙間を作らない。1間の板張りには8人工が必要である。

温突の部屋の片引きの障子戸、扉などの建具は建築現場で作った。

基壇の石積みは軒先よりもやや内側に、花崗岩で積む。

最後に土塀を積む。粘土のみを材料とする場合と粘土と石で造る場合がある。幅を2尺位にして、高さを5尺位に造り、瓦をのせると、150年位の耐久性がある。

2-5 建築儀礼

建築を始めるにあたって特に吉日を選ぶということはない。建築過程のうち最大の儀礼はC棟、主婦の部屋の板の間の棟上げの儀礼である。棟上げは、依頼主の誕生の生年月日から吉日と時間を選んで行う。棟上げの日、大工は、棟木に建築の年月日を墨書する。この棟木には特に立派な材木を選ぶ。女性が跨がないようにと、棟木を他の材木とは別の場所で保管する。棟木は両端を木綿の布で吊し、引き上げて束に固定させる。途中落としてしまった場合にも、新たに棟木を作り直す。

棟木に記す内容は1例をあげると次のようである。棟木の両端には「龍」(主婦の温突の部屋側)と「龜」(長男の部屋側)の文字を記す。龍と龜は相互に調和して火災を防ぐと考えられている。2つの文字の間には、例えば、「光武紀元後四十三年己卯二月十一日丁卯同時之柱上樑 己亥生 成造」というように記す。墨書きした面を板の間の方に据える。

棟上げが終わると、家の繁栄を願う祭礼を行う。図2-1の(ホ)の柱に韓紙を折って白い糸で柱に縛り、成造神としてまつ。柱の前に膳に供物を調える。供物は餅、御飯、皮つきのクリ、ナツメ、リンゴ、干しメンタイ、イシモチ、蒸したブタの頭などである。依頼主は成造神の前で、つまり主婦の温突の部屋に向かって最高の3回の拝礼する。拝礼が終了すると、大工ら職人と村人たちが酒宴を催す。

棟上げに続く儀礼といえば、新しい祠堂に先祖の位牌を安置する時である。家屋の建築が終了し、転居が始まる前の日までに、吉日を選んで祠堂に四代の先祖の位牌を安置する。旧住居から長男、次男、祖母らが各自一代ごとの夫婦の位牌を胸に抱いて、新しい祠堂へと移す。祠堂に向かって右から四代、三代の位牌というふうに安置

する。これら位牌の前に供物を供え、当主が祝文を読む。

次にあげるのは儀礼というよりは祝いごとであるが、転居の前日、当主は大工と建築関係者や村人と酒宴を催す。村人はマッチとろうそくを贈る。これには、「火のごとく栄えるように」という意味がある。

2-6 家屋とまつり

祠堂では当主より遡ること四代の先祖をまつる。四代であるから少なくとも8人(夫婦)の位牌を安置する。命日と元旦や秋夕(陰暦8月15日)などの名節には儒教式に先祖をまつる。命日のまつりは次のようである。午前0時から1時までの間に、位牌を祠堂から主婦の部屋の板の間に移し、中庭に向けて立てられた屏風の前に位牌を安置する。位牌の前の卓には餅、ブタ肉、イシモチなどの魚、ナシ、リンゴなどの果物が、伝統に則った配列で供えられる。まつりに参加するのは門中の男女で、男性は板の間に立ち並び、当家の主婦、嫁、門中の女性たちは縁側に並ぶ。酒を献げ、挨拶文を読み終わると、位牌は夜中、祠堂の元の位置に戻されるという式次第である。

他に次のようなまつりがある。まず、棟上げの日、韓紙で成造神をまつり、成造の誕生日を祝う儀礼を行ったが、その成造神に対して主人の年齢の奇数年の1月(陰暦)中の吉日に、主婦は巫女を呼んでまつりをあげる。その時、韓紙を焼くが、焦げた紙が天井に付くのがよいとされていた。新しい韓紙に替えてまた、2年間、家の子孫繁栄や財運を見守るわけである。巫俗式のまつりが行われるのがこの成造神である。

この柱付近の板の間には2~3斗の穀物が入る甕を置き、精米したコメを中に入れて、藁で編んだ蓋を被せる。これもまた、家の繁栄を願う成造神である。毎年、秋、精米を甕に入れ替える。このコメはその家が所有する水田で収穫したものである。

産(三)神は主婦の温突の部屋の奥まったところの、人の手が届かない梁付近のコーナーに、棒を渡して台座を作り、その上に直径20cm余の半切したヒョウタンの容器をのせ、中にコメを入れたものを産神としてまつる。コメは毎年新しいものに取り替え、紙の蓋をして表面を覆い、通年まつる。子孫を授かるように、子孫が順調に成育するようにと願うわけであるが、出産があれば、ワカメ汁と御飯を供える。子供が生まれた家では、大門に、男児はトウガラシ、女児は炭を差し込んだ左縫いの縄を、産後3週間位張っておく。悪い霊が入らなくするためというが、実際には訪問客を断るという役目を果たしていた。

また、龍壺とよばれる壺を人目につかない主婦の温突の部屋の隅にまつる。壺の中には2、3升のコメが入れている。毎年、秋の収穫時にはコメを入れ替える。

主婦は家の中でいざこざがあると、主婦は夜明け前に井戸水を汲んで、膳にのせて龍壺に献げ、家内の平穏を願う。産神や龍壺のまつりは女性が行う伝統的な民間信仰である^(注5)。

2-7 まとめ

旧両班の家は、儒教と気候から影響を受けて配置されている。前者は四代の先祖をまつる祠堂、主人の部屋、主婦の部屋という男女による住空間の分離であり、後者は冬の寒さに対応するための床下暖房(温突)の部屋と夏の暑さに対応するための板の間が、それぞれの部屋に対応していることである。

こうした男性が中心の儒教の教えに基づいて区切られた空間で、女性は儒教式の道徳を生活の規範としてくらし、先祖のまつりの供物を準備してきた。自身の精神的葛藤は、巫俗や民間信仰を拠りどころにして家政の采配を振るってきた。複数の信仰や儀礼を実行しているのである。

以上、家とくらしにかかわる生活規範や信仰について見てきたわけだが、建築段階でどのような配慮があるだろうか。例えば、主婦の温突の部屋の礎石を最初に置く、主婦の板の間の柱を最初に建てる、棟上げの儀礼は主婦の板の間の棟木をのせたその日に行い、主婦の温突の部屋に向かって主人が三拝することである。なぜ主婦の部屋の基壇が高いのかを含めて、こうした一連の行動は主婦の部屋に集中しているのか。建築主である主人も、建築に携わる大工もその理由を、「主婦の部屋は生命を誕生させるところ故に、家中で最も大切な部屋だから」という。くらしの中で儒教式や巫俗式のまつりが行われる以前に、建築の段階では、家には子孫誕生への祈りを込めながら造られているということが、今回の調査で明らかになった。

こうしてみると、家の儒教と民間信仰と巫俗は、相互に何らかの関連をもちつつ並存し、家の存続と繁栄への願いに関与しているのである。

(福本美知子)

3. 北アメリカ ナバホの家屋

3-1 はじめに

アメリカ合衆国の南西部にくらすナバホは、ホーガン(hogan, あるいはhooghan)とよばれる伝統住居をもつ。巨大な白人文化に取り囲まれながらも、近隣のホーピ、ズニー、アコマ、テワなどのプエブロ・インディアンとともに独自の住居の伝統を保持する数少ないアメリカ先住民の1つである。現在もこのホーガンで電気や水道のないくらしを営む人々がいる一方で、近年は白人文化がもたらした切妻型の木造家屋(House)が主流を占め、

ホーガンが住居として新しく建てられることは極めて少なくなってきた。

小稿では、文献資料と現地調査にもとづき、ナバホの伝統住居の理念と構造、その歴史的な変遷、ならびに現状について概観してみたい。

3-2 ナバホについて

「ナバホ」(Navajo)とは「大きな耕地」という意味で、周辺の農耕民プエブロ・インディアンから羨望の眼差しをもってつけられた名称で、自らは「ディネ」(Dine, 人間の意)と称する。アリゾナ州、ニュー・メキシコ州、ユタ州にまたがる総面積65,659km²(日本の約1/6の面積)という広大な居住域は、アメリカ先住民のいわゆるリザベーションの中では最大で、1990年の最新のセンサスでは、ここに約15万人(全米での総人口は、約22万人)のナバホが部族政府の自治のもとにまとまってくらししている^[1]。

ロッキー山脈東麓部のコロラド高原に位置するこの地域は、大半が1,500~2,100mほどの標高にあり、気温の季節変化(氷点下~38℃)と日差し(±20℃以上)が激しい。降水量も季節差、年差が大きく、年間の平均降水量は254mm程度である^[2]。

アリゾナ州側の南西部から北西部、ユタ州にかけての北部とニューメキシコ側の西部が乾燥帯で特に植生に乏しい地域で、中央部から南部にかけての大部分の土地は半乾燥帯に属し、イネ科やセイジブラッシュ(*Artemesia* spp.)などの草や低灌木が大地を埋め、所々にジュニパー(*Juniperus* spp.)、ピーニョン・マツ(*Pinus edulis*)、ポンデロッサ・マツ(*Pinus ponderosa*)の林があり、ホーガンをはじめとする建築物の材料や暖房、調理用の薪として利用される。

ナバホ語は、アサパスカン系の言語に属し、^[注3] ナバホの祖先は、元来はカナダ西部の森林地帯で採集狩猟と漁撈生活を営む人々であった。それが、同じアサパスカン

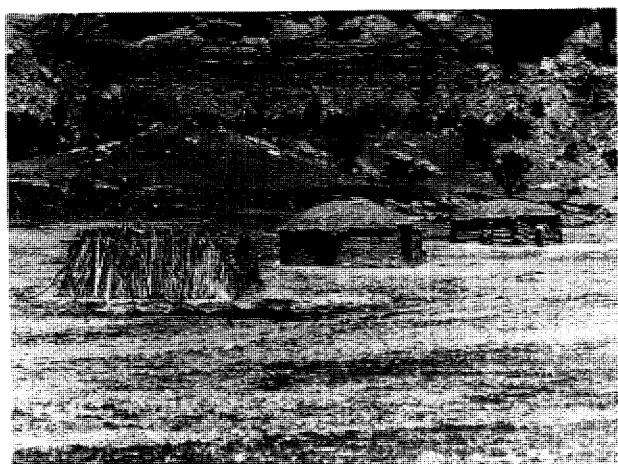


写真3-1 シェイド(左)とホーガン(中央と右)
(Navajo Trival Museum 所蔵より。)

系の言語集団に属すアパッチ族とともに原因不明の南下を始め、少なくとも17世紀以前に、現在の南西部にたどりつき、周辺の農耕民プエブロ・インディアンから農耕技術を学び、この地域に定着するようになった。17世紀の末から18世紀中ごろにかけて、スペイン人のもたらしたヒツジ、ヤギ、ウマ、ウシと牧畜の技術を同じくプエブロ・インディアンを通じて獲得し、この農耕と牧畜という2つの生業形態の伝統は今日に引き継がれている。

現在の総世帯の半数(1989年)が賃金労働による収入で賄われているが、失業率も35%と高く、平均的な家庭の年収は約12,000ドルと低く、57.4%の家庭が生活保護の対象となっている(1990年)。このことが、後に述べるナバホの住宅状況に大きな影響を及ぼしていることはいうまでもない。

3-3 ナバホの住居分類と住居慣習

ナバホの人々は、住居を大きく次の3つに分類している。

①チャーオーあるいはシェイド(写真3-1)

②ホーガン(写真3-1~4, 参照)

③キンあるいはハウス(写真3-5, 6, 参照)

①は、建てられる場所によりさらに2つに分けられる。1つは、主に夏場に暑さをしのぐ目的で、②、③の主要な住居の周囲に建てられるものである。もう1つは、農耕+牧畜という伝統的な生業を営む場合、主に牧草地の関係から夏の住居と冬の住居の間を季節移動する際の夏の一時的な住居として利用されるものである^[注4]。いずれの場合にも夏場の短い期間に利用されるものであり、ラマダ(ramada)とよばれる木の4本柱に横梁を渡した基本構造に枝木や細い木材で屋根や壁を造ったものと、サマー・ホーガンとよばれる②のホーガンの骨組みだけで屋根と壁に土を使わないものなどがある。

②、③の主要な住居に関しては後述するが、先に住居とその付属物、居住形態、宅地の選定等についてふれておく。ナバホの人々は、母系の大家族(核家族と娘夫婦の家族)がひとまとまりとなりホームステッドを構成してくらす。1棟の家屋に1つの核家族が基本だが、子供が大きくなると(特に未婚の娘の場合)、棟を分ける。北方アサパスカンの伝統をくむものか牧畜生活の必要性からかは不明だが、一般に住居は互いに隔絶して建てられ、住居の集中は、このホームステッド内部に限られる。現在見られる典型的なホームステッドは、通常1棟のホーガンと1~2棟のハウスが中心となるが、これらも10~20mほどの距離を隔てて設置される。これらの住居に1棟のラマダ、ヒツジ・ヤギ・ウマ用の複数の家畜囲い、家畜の日除け、便所、トウモロコシパンを焼くドーム型のかま、野菜等の地下貯蔵倉庫、スウェット・ハウ

ストよばれる蒸し風呂などの付属施設が見られるが、これらの配置に一定の規則は見られない。このホームステッド全体が、牧草地、あるいは農地に囲まれている。

ホームステッド単位での独立、プライバシーを重んじる傾向が強く、親族関係にないホームステッドが集合をつくることは有り得ず、このことが広大な大地に極端な距離を置いて点在する家屋という、この地独特の景観をつくりだしている。しかし場合によると、母系の親族関係でつながる2～4のホームステッドがゆるい集合（母系のリネージ共住集団）を構成することもある。ホームステッドの立地としては、農地や牧草地へのアクセスの便・水・薪の確保の便が考慮され、さらに平坦で夏の日差しを和らげる日陰のある目立たない場所が好まれるが、近年では車での買物・通学・通勤に便の良い幹線道路沿いの土地が選ばれる傾向も強い。また、首都ウィンドウ・ロックなどの大きな町に見られる集合住宅は、Navaho Housing Authority (N.H.A.) により推進された人口密集地帯における住宅不足の早急の解消を目的に進められた集合住宅建設整備計画によるものであり、居住者の意見や好みの問題ではない^[11.5]。

3-4 ホーガンの建築と一般的特徴、理念

ホーガンという名称は、ナバホ語で、「住む場所」という意味をもつ。最も長い歴史をもつ住居であるだけに、形態や構造、素材には、時代による変遷が見られるが、その中でも伝統的と見られるタイプに共通して見られる特徴や住居空間の意味などについて概観する。

まず全体を真横から見た時の外観は、円錐形ないし円柱形あるいは半球形で、プランは円形ないし六角形、八角形である。内部は、仕切りのない、^{ひとま}一間構造をもつ。伝統的な建築材料としては、壁構造を造る太い材にピーニヨン・マツかポンデロッサ・マツ（長く真っ直ぐだが虫害に弱い）、比較的軽く細目の材を必要とする屋根伏せには、ジュニパー、あるいはアスペン、コットンウッドなどを用い、木材の骨組みの隙間をトウモロコシの皮や樹皮などで埋め、最後に湿り気を与えた土で全体を覆い隙間を埋める。ホーガンの大きさは、タイプにより異なる（3-5 ホーガンの変遷 参照）が、今日最もよく見られる Cribbed Log Hogan の場合で、直径6.5～8m、高さ2.5～2.8m ほどである。

木材は、この地域では一般に貴重で伐採や運搬に多大な労力を必要とするが、内部で人が死んだために放棄された家屋の木材や、落雷による倒木を使用することは極端に忌避される。木材は、ねじれや乾燥による収縮を避けるために、伐採後よく乾燥させてから使うが、この期間と敷地全体の床部の土を若干掘り下げる作業期間を除き、骨組みの木材の組み立て作業は1日で終了した。建築を専業とする大工はおらず、作業は家長とその母系親

族が協力して行った。協力者への食事の提供のほか、現在ではセミプロ的な熟練者（親族関係にないことが多い）に主導してもらうことも多く、この場合は若干の礼金を払う。

ホーガンの完成後、入居する前に必ず呪術者^{じゅじゆつ}による House Blessing Way とよばれる新築儀礼を行い、居住者の将来の幸福を祈願する。ホーガンの出入口は、必ず太陽の昇る方角である東向きに建てられ、日の出の祝福を毎日得ることと、儀礼行為における東の方角を開放しておく目的をもつが、このことは二次的に南西の卓越風（ことに春先は砂嵐^{すなあらし}を伴う）や北からの寒風を遮る効果をもつ。この出入口の東向きと関連して、東西南北の方角には、象徴的な意味があり、東は大地の世界、南は山の世界（家屋内部も入口より左半分は、男の空間とされる）、西は水の世界、北はトウモロコシの神の世界（同様に、右半分は女の空間）が存在し、4方向の果てにはその世界の力の源泉としての聖山があると考えられている。これらは、色のシンボリズムとも結びつき、家屋を建設する際に各方向の基礎部の土中に、白い貝（東）、青いトルコ石（南）、黄色のアワビの貝殻（西）、そして死の方角ともされる北には、黒玉石が儀礼的に埋められ、4つの方角に存在する超自然的な力に対する敬意を払うとともに、それらの力の均衡によってもたらされる天候の安定や人間の生活の無事、作物の豊作、家畜の成長を祈願した。最近では、これらの象徴的な財貨を実際に埋めることはほとんどないようだが、人々の知識としては伝承されている。

またホーガンは、ナバホの出生神話において、最初の人間が建てた家とされ、Blessing Way（祝福儀礼）の歌唱の中で、ナバホの最初の男と女が、子孫の女性に対して「毎日の日の出とともに、トウモロコシの花粉と実を砕いた粉を4つの方角に向けてふりかけて、ホーガンを清めよ、と命じた」とされているが、ナバホの主婦の中には今日でもこの教えを毎朝実行し、その日の家族の無事息災を祈る者がいる。このようなナバホの世界観、宗教観念と強い関係をもつホーガンの内部では、現在も病気の治癒祈願儀礼や Blessing Way（成女儀礼や旅に出かける時の安全祈願儀礼など）と総称されるさまざまな儀礼が行われ、その儀礼の際に力を借りる神や霊の超自然的な力は、伝統的なホーガンの内部でなければ寄りつかないと信じられている。ホーガンが、今日のナバホに根強く必要とされる原因は、まさにこの儀礼場としての役割にある。

3-5 ホーガンの変遷

人類学者や民族建築家により、ホーガンはその形態や構造、素材という観点からいくつかのタイプに分類され、時代による変遷が研究されているが、^[11.6] ここでは次の①

～③の3つのタイプに大きく分けてみた。

①【Conical Forked-pole Hogan】(写真, 図3-2)

最も古いタイプで俗に「男のホーガン」とよばれる。¹¹⁾ このタイプは、現在見かけることは少ないが、考古学的に最も古い住居址から発見されているもので、北方アサバスカンの伝統を受け継ぐ。頭頂部が二股に分かれた3本の基礎柱をまず組み合わせ、その周囲に補助的な柱を円周を描く形に立てかける。平原インディアン¹²⁾のティピイと似た構造をもつが、その入口部に、屋根をもつ張り出し部分が設けてあり、全体を土で覆ってある。伝統的な儀礼を行うには、この原初のタイプが最もふさわしいが、住居としては快適さに欠ける、という何人かのインフォーマントの話聞いたが、儀礼の体系や慣習が確立されたのは②のタイプ以降であるという指摘もある。

②【Four-sided Leaning Log Hogan】(写真, 図3-3)

少なくとも19世紀の後半までには使用されていたタイプ。上の①のタイプが、ある程度の内部空間を確保するにはかなり長くて真っ直ぐな木材を必要とするため、そのような木材が入手できる地域に限定される、あるいは伐り出しと運搬に多大な労力を必要とするのに対し、このタイプでは、頭頂部が二股に分かれた4本の基礎柱を土中に埋め、それに横梁を渡して枠組みを造り、入口側以外の側面に斜めに立てかけて壁を造る。入口側には、①のタイプと同様な張り出し部を設け、土で全体を覆い、ほぼ半球

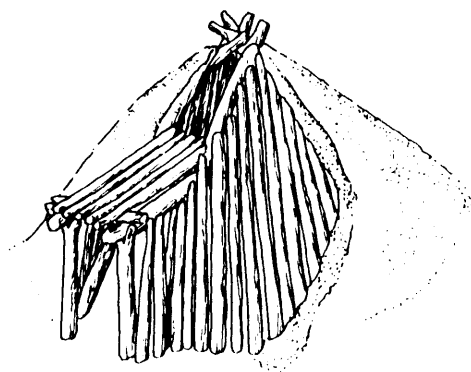
に近い丸みを帯びた形状にしてある。平らな屋根部は、大量の土をのせてドーム型の形状にすることで降水時の排水効果を高めている。長くて太い木材を必要としないことから、3章3-2で述べた乾燥地帯に多く見られるタイプである。

③【Cribbed Log Hogan】(写真, 図3-4)

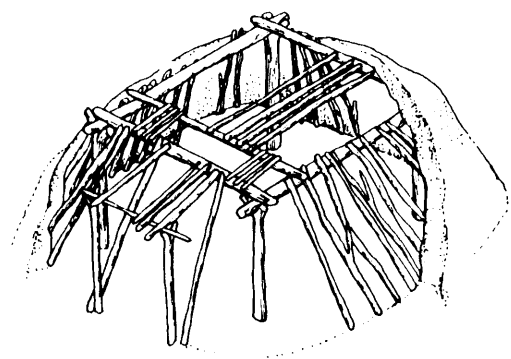
①、②のタイプは、木材を縦に使用した壁であるのに対し、横組みに使用されている。このタイプは、白人のログ・ハウス(但しプランは、4角形)の壁を採用したもので、1880年にサンタフェ、アチソン、トベカなどの鉄道が敷かれる際の白人の作業小屋や、その後急増した交易所の建築物の影響が強いと考えられている。①のタイプに対して、「女のホーガン」とよばれる。

3-6 ハウスの導入

伝統的なホーガンとは全く異なる長方形のプランをもつ白人のハウスが導入されたのは、上記の③のタイプのホーガンが現れた原因と同じで、時代的にもほぼずれがなく、100年以上の歴史をもつことになる。当初は、1地域のナバホのまとめ役として合衆国政府や白人との交渉役を果たしたヘッドマンなどとよばれる人々や経済的に余裕のあるナバホが、その地位を誇示する目的で建てた。例えば、ナバホ部族評議会の初代議長であるヘンリー・チャー・ダッジが、1930年初期に建てた家具・調度つきの豪華なハウスは、現在もその子孫により使用されている



写真, 図3-2 Conical Forked-pole Hogan
とその骨組み構造図



写真, 図3-3 Four-sided Leaning Log Hogan
とその骨組み構造図

が、グッジ自身は、その横にある伝統的なホーガンで寝起きしていた^{注8)}。

伝統的なホーガンにはさまざまな利点がある。^{のこぎり}鋸と鉄斧さえあれば、近くに生える木を利用して安く建てられる。丸太や土という断熱効果の高い素材を使い、半球形なので、一定の容積を覆う建築材を最大限に節約でき、暖房・防風・防水の効率面から考えても最高の形態をあわせもち、3-2で述べたようなこの地の気象条件にあっても夏は涼しく、冬は暖かい。一方のハウスは、労力と材料費の面で高価なものとなり、また特に牧畜という移動を伴う伝統的な生業形態に合わず、何よりも内部で儀礼を行う場所として認識されていない。

白人との間に苦い歴史をもつアメリカ先住民は、ナバホに限らず一様に白人やその文化に対し生理的な嫌悪感を抱いていた。アメリカン・インディアン政策局 (B.I. A.) の進めた先住民の白人文化同化政策は、衛生面の向上と定着生活化という理由で、住宅政策の面でも強制されたが、一向に実を結ばなかった。このような歴史がありながらも、第二次世界大戦を契機に、兵役や居留地外での出稼ぎのために、白人やその文化との接触の機会は増加し、賃金労働者と現金収入の増加、農業への傾倒、人口増による放牧面積の減少に伴う移動の減少、ピックアップとよばれるトラック等の普及による職場や放牧地への移動、水や薪の運搬の効率化が進み、住居はより定着性、恒常性の高いものとなってきた。同時に1950年代以降、子供の就学率も飛躍的に増加し、「衛生的、快

適さ、便利さ、先進的」といった白人社会の価値観が浸透するようになり、ハウス形態の住居を選ぶ人々が1960年代から急増した^{注9)}。

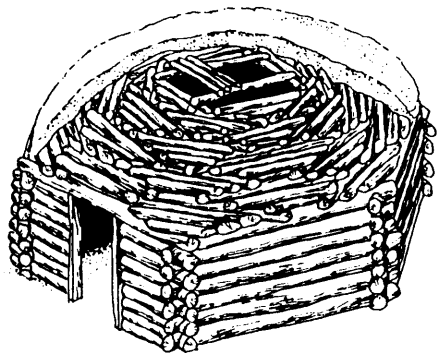
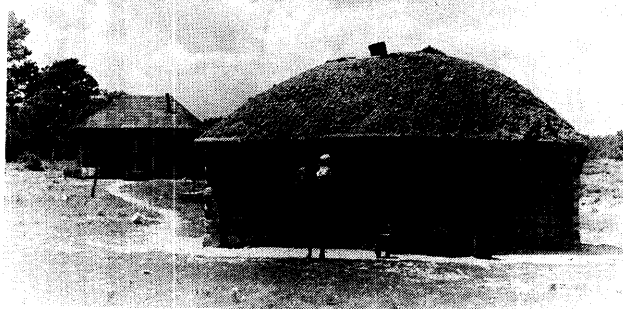
1970年代に行われた居住地域全体にわたる、実際に人が利用している4,000件もの既存家屋を対象とした調査では、ホーガンとハウスの割合は、すでに3:7という比率を示している^{注10)}。ナバホ部族政府の住宅サービス局が、1993年に総額約35億円の予算を投じて住宅建築の資材面・労働力面の援助を提供した家屋は350軒にのぼるが、その大多数がハウスの建設である。

3-7 住居の現状

3-3で述べたように (ホームステッドの構成を参照)、今日1つのホームステッドには、多くの場合最低1つはホーガンが見られるが、人々は、住居=ハウス、儀礼場=ホーガンという明確な使い分けをするようになって



写真3-5 ハウス (Navajo Trival Museum 所蔵より)



写真、図3-4 Cribbed Log Hogan とその骨組み構造図
(以上の写真は Navajo Trival Museum 所蔵より、イラストは参考文献9)より転載)



写真3-6 ホーガンからハウスへの移行期の痕跡を残すハウス。壁は、長方形のプランをもつ校倉構造をもち、平屋根は土で覆われている。中央部には、ホーガンと同様に煙突が見える。ハウスを真似た Cribbed Log Hogan といった方が正確かも知れない。1941年撮影。(Navajo Trival Museum 所蔵写真より)

た。住居としてのハウス建設で経済的に余裕がなく、儀礼場としてのホーガンを新築できない人々は、親族関係にある者同士でホーガンを共同で使用する事が多くなっている。その一方では、儀礼を司る呪術師^{つかさど}の人数の減少が指摘されⁱⁱ¹¹⁾、近い将来における儀礼自体の存続が危ぶまれている。ホーガンが、儀礼場としての役割から、公共建設の外観や部族政府の国旗のデザインなどの、ナバホとその文化の象徴としてのみの役割に変わっていく可能性も考えられる。

このような状況の中で、ナバホ部族政府の住宅サービス局が、全く新しいタイプの住宅造りに挑んでいる。家畜用のヘイキューブをブロック・石で覆い、それを土とコンクリートで塗り固めた壁を造ることで建設コストの削減、断熱効果の上昇をねらい、さらに効率の良いソーラー発電設備を備えることで暖房・調理用に使用される薪の使用量（現在68%の世帯が薪を必要とする生活を送っている）をおさえ、森林保護にも貢献するという多くの課題を背景にもつ高機能住宅である。その玄関に続くリビング内部をドーム型にすることで、ホーガンの理念とその機能をもたせようとしている。2年後に試作家屋を完成させ、5年後の実用化を目指しているが、果たして人々はこのホーガン・ハウス折衷型家屋を、内部で儀礼の行えるホーガンと見なすか否かは注目に値する。

（渡辺 道斉）

4. むすびにかえて

第1章では新旧の集落に注目し、両者に根本的な違いのあることを指摘した。しかも古い集落フタは変質ないし崩壊の過程にあり、他方新しい集落ドゥスンは大増大しつつあることが明らかになった。こうした傾向が何を意味するのか。民族固有の論理がどのように展開していくのか、今後探っていきたい。

第2章では、かつて両班とよばれた支配クラスの家屋を対象に、建築構造や神まつりをまとめた。日本ではほとんど事例報告のない分野であり、日本を含む近隣との比較研究に良い材料を提供できたものと思う。但し、今回は日本統治時代の影響、農家を含めた農村地域の研究、近代化による住宅観の変化については取り上げることができなかった。今後の課題である。

第3章では、伝統家屋ホーガンが歴史的に3つのタイプに分かれることを指摘し、それぞれの特徴を論じた。今日、ナバホの人々は、ハウスに住み、ホーガンで儀礼を行っている。住居としてのハウスと儀礼の場としてのホーガンという使い分けは、国家に組み込まれた少数民族ナバホの立場を象徴しており、今後ひとつの民族問題としてどのように解決していくのか注目したい。

<注>

・韓国安東地方の家屋

- 1) 図の家屋は安東郡礼安面婦洞洞に1939年、建築の家屋である。1975年に解体し、1983年に野外民族博物館リトルワールドに復元した。李氏朝鮮時代の両班の子孫がくらしした家である。
- 2) 隠居は一般的ではないが、隠居を前提にした住み替えでは、主人と主婦は長男の部屋に移り、長男は主人の部屋、嫁は主婦の部屋に移り住む。これを機に長男に家督を譲渡する場合もある。主婦の部屋に住む嫁には米櫃、物入れなどのすべての鍵を渡す。
- 3) 陰宅と陽宅という言葉があるが、前者は墓で後者は家をいう。いずれの建設にあたって子孫と家運の繁栄を願って、風水師に依頼して建設に良い土地を選択する。
- 4) 主たる材木はマツである。名産地は慶尚北道の春陽で、ここのマツは真っ直に伸び、やにを多く含んでいる。材木店では、12、9、6尺の長さに製材してある。例えば、12尺の材は柱用で、9尺の高さに加工作る。
- 5) 安東地方における家のまつりは、『韓国の民族大系4 慶尚北道』に記載がある。そこでは、竈王、廁神、七神信仰なども報告されている。本文中の家のまつりは、図で紹介した家屋の旧所有者からの聞き取りを基に記載した。龍壺は主婦の温突の部屋だけでなく、物置など人目につかないところに置くこともあったという。

・北アメリカ ナバホの家屋

- 1) 総人口で見ると、チェロキー族の31万人に次ぐことになるが、ひとまとまりの居住域にくらすという意味では、人口でも最大の集団である。
- 2) 晩春と秋はことに雨が少なく、夏場に雨を伴った強風が多い。冬には前線にともなう低気圧による暴風雨、雪にみまわれることがある。
- 3) 1990年の政府統計によると、5歳以上の人口の82%が家庭でナバホ語を話し、学校の授業でも教えられているが、現在の高校生以下の年代の子供たちの母国語離れ、能力低下が指摘されている。
- 4) 牧畜に主眼を置く場合、夏キャンプは山の牧草地にあり、冬のキャンプをより低地の牧草地に構える。農業を基本とする場合、夏キャンプが低地の農地、冬はやや高地の薪の入手しやすい場所となる。
- 5) 1968年に全米の先住民社会に先んじてセイラーに開学されたナバホ・カレッジでは、キャンパスの隣にホーガンの外観をもつ快適な教職員用住宅を建設したが、ナバホの職員は住宅同士があまりにも接近して建てられているために入居を拒み、当初は少数の白人スタッフの家族が住むだけの寂しい結果となった。
- 6) 例えば、参考文献11)では、14のタイプに分類し、詳細な時代考証を試みている。また、ナバホ語では、6つのホーガンのタイプの名称がみられる。
- 7) 参考文献10)にも指摘があるが、男、女のホーガンには使用方法や機能面での相違は見いだせず、白人がつけたほとんど意味のない英語の名称をナバホの人々も使うようになったといわれている。
- 8) 別の事例では、大金を費やしてハウスを建設し悦に入っていたが、そのハウスは倉庫専用として使われたといった類のエピソードがある。
- 9) 郡(州の下位行政単位)の福祉課では、「床と窓のあるハウスでないお家には帰りたくない」という趣旨の子供たちの作文を見せながら、親の世代の意識改革を進めたが、子供との同居を強く願うナバホの親には、子供の願いという形でかなり強い影響を及ぼした。
- 10) 参考文献11) pp.209～228参照。
- 11) ナバホ語のみを使用する呪術師の特殊な知識体系の習得には、10年以上もの修行期間を要し、しかも収入は少ない。後継者不足の危機を迎え、呪術師の協会組織を結成するという深刻な事態に至っている。

<参考文献>

・インドネシア、トバ・バタックの家屋

- 1) Tobin O.L.1963 “The Structure of the Toba Batak Belief in the High God” South and South-East Celebes Institute for Culture, Macassar.
- 2) 高橋貴, 神谷平一郎「トバ・バタック族の家屋」リトルワールド研究報告6号, 1982年

・韓国安東地方の家屋

- 1) 伊藤重人「正当性と土着性」文化人類学名No.3, pp. 131~147, アカデミア出版会, 1986.6
- 2) 伊藤重人編著「もっと知りたい韓国」弘文堂, 1985.
- 3) 韓国文化広報部, 竹田 且・任 東権訳「韓国の民俗大系, No.4」国書刊行会, 1990, 10
- 4) 韓国文化広報部, 富井正憲監訳「韓国の文化財」岩崎美術出版社, 1989.9
- 5) 朱 南哲著, 野村孝文訳「韓国の伝統的住宅」九州大学出版会, 1981.8
- 6) 襄 正仁「安東지역 郷班地主層에서의 1920-1930年代住生活 空間利用에 관한研究」安東大学民俗論集, pp177~202, 1992.1
- 7) R・ジャネリ, 任敦姫著, 樋口淳・金日榮・近藤基子訳「祖先祭祀と韓国社会」第一書房, 1993.12

・北アメリカ ナバホの家屋

- 1) C.Kluckhohn & D.Leighton. “The Navajo” 1974
- 2) David & Susan McAllester. “Hogan, Navajo Houses & House Song” Wesleyan Univ. Press. 1980.
- 3) D.J.Tsosie & L.Rodgers. “1990 Census. Population and Housing Characteristics of the Navajo Nation” Navajo Government, Pub. 1993.
- 4) G.Witherspoon. “Language and Art in the Navajo Univers” Univ. of Michigan Press. 1977.
- 5) I.V.Dooren “Navajo Hooghan and Navajo Cosmology” American Indian Cosmology. D.MacCaskill. 1987.
- 6) J.M.Goodman. “The Navajo Atlas” Univ. of Oklahoma Press. 1982.
- 7) K.B.Kelly & P.M.Whiteley. “Navajoland. Family and Settlement and Land Use” Navajo Community Colledge Press. 1989.
- 8) L.Rodgers “Chapter Images. 1992 edition” Navajo Government, Pub. 1993.
- 9) P.Nabokov & R.Easton” Native American Architecture” Oxford Univ. Press. 1989.
- 10) R.M.Underhill “Here Come the Navajo !” Bureau of Indian Affairs. 1953.
- 11) S.C.Jett & V.E.Spencer. “Navajo Architecture” Univ. of Arizona Press. 1981.

<研究組織>

主査 高橋 貴 野外民族博物館リトルワールド研究員

委員 福本美知子 愛知淑徳大学助教授

” 渡辺 道斉 市邨学園短期大学講師